

過去の物と過去の出来事

星野 徹*

Toru HOSHINO

I 現在主義

昨夜は頭痛がしていたが、今は頭はすっきりしている。昨日の頭痛は消えてしまって今は存在していない。午前中に空を覆っていた雲は今はすっかり晴れて太陽がさんと照っている。あの雲もやはりもう存在していない。一方で今年の夏の蝉はまだ存在していないし、来年の桜もまだである。

本当に存在していると言えるのは現在存在しているものだけであるように思われる。たとえば、昨夜の頭痛が存在しているとすれば、なぜ今、私は頭が痛くないのだろうか。存在しているにもかかわらず痛くない頭痛とはいかなる存在者なのだろうか。また、今年の蝉が存在しているとすれば、なぜ今、私は蝉の鳴き声を聞くこともできなければ、蝉の姿を見ることもできないのだろうか。存在しているにもかかわらず姿を見ることも鳴き声を聞くこともできない蝉とはいかなる存在者なのだろうか。

こうして、「現在主義者」と呼ばれる人々は、存在するのは現在の対象だけであると主張する。したがって、現在主義によればリーリーやシンシンは存在するが、ランランやカンカンは存在しないし、リーリーとシンシンの子供も存在しない。また、時の経過とともに存在者のリスト

も変わって行く。1600年には富士山やパリのノートルダム大聖堂とともに、金閣寺やデカルトや徳川家康やニホンカワウソがリストに含まれているが、現在のリストには金閣寺もデカルトも徳川家康も、おそらくニホンカワウソも入っていない。それらに代わって、東京タワーやイチローや白鵬が登場し、富士山やノートルダム大聖堂と並び立っている。

現在主義の論拠は、それが日常的な世界像をうまく掬い取っているというところにある。現在主義者によれば、「過去と未来が現在より実在性の度合いが低いということは常識の一部(Zimmerman, 2008, p. 221)」なのであり、「現在主義は平均的な市民が受け入れている常識的な見解(Markosian, 2004, p. 48)」なのである。

しかし、他方では、現在主義的世界は私たちが考えている世界とは似ても似つかない世界であると考える哲学者もいる。たとえば、ルイスは物の性質変化に関する次のようなパズルを取り上げ、それに対する現在主義的解答を批判している。

物の内在的性質は変化する。物は形や色が変わっても同一の物として存在し続ける。私が椅子に座り、次いで立ち上がれば、私の姿勢は曲がった形からまっすぐな形に変化する。それでも私が私であることに変わりはない。しかし、なぜ同一の物が曲がっていることとまっすぐであることという相いれない性質を持つことがで

* ほしの・とおる

埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授、哲学

きるのだろうか。

現在主義者ならばこのパズルに簡単に答えることができる。物の持つ性質とは、物が現在持つ性質のことである。私の姿勢が今まっすぐならば、私が曲がった形をしていることは端的にありえないのである。

ルイスはこうした解決法は物の持続的存在を否定するという信じがたい結果をもたらすと言う。「この解決法は、現在以外の時間は存在しないと言うことによって、私たちすべてが信じていることに反対している。死刑執行直前の人間以外、自分に未来がないと思う者はだれもいないだろう。自分は過去を持たないと信じる者はなおさらないだろう(Lewis, 1986, p. 204)」。そして、現在主義に代わって、物は時間部分からなるという、「四次元主義」と呼ばれることもある説を提案する。私たちは時間部分によって構成されているのであり、曲がった姿勢をしているのは先程の私の時間部分であり、まっすぐな姿勢でいるのは次の時点における私の時間部分なのである。昨夜の頭痛は、四次元主義によれば、消えてなくなったのではなく、昨夜の私の時間部分に生じているということになるだろう。私は、頭痛を感じていた昨日の私の時間部分と、痛みを感じていない現在の私の時間部分と、歯痛を感じている未来の私の時間部分等々によって構成される時間上に延び広がった存在なのである。

ところが奇妙なことに、ルイスが現在主義に向けたものとよく似た批判が四次元主義に対して向けられることがある。世界が四次元主義的ならば、目の前にある机も、私が腰かけている椅子も、そしてこの私の体も、五分前にも一分前にも、五分後にも一分後にも存在していない。それらはこの瞬間だけの存在者である。この瞬間の私も机も、私や机のすべてではなく、私や机の瞬間的な部分だからである。そして、こう

している間にそれらの時間部分が次々生じ続けていることになる。しかし、私や机や椅子が無から生じ続けているなどとは信じがたいことである。たとえば、トムソンは、時間部分が連続的に生成消滅とする四次元主義はクレージーな形而上学であると評している(Thomson, J. 1983)。

しかし、四次元主義的世界では物が無から生じると考えるのは、あるいは、四次元主義に対する誤解なのかもしれない。物は無からではなく、先行する時間部分から生じると言うべきなのかもしれない。四次元主義は、現在の対象だけではなく、過去の対象も未来の対象も存在すると考える、いわゆる永久主義でもあるからである。ヘラーが示唆するように、トムソンが批判する世界像は、純粋な四次元主義ではなく、時間部分と現在主義の混合物なのかもしれない(Heller, 1990, pp. 16-19)。

時間部分が無から生じてくるのであれ、先行する時間部分によって生み出されるのであれ、いずれにしても、生成する時間部分によって構成される物の集合としての世界という四次元主義的世界像は、やはり受け入れることはできないと私は考えているが、そのことについては以前に論じたことがあるのでここで立ち入ることはしない。

ところで、トムソンが四次元主義を誤って現在主義的に解釈しているとすれば、ルイスは、現在主義者に誤って永久主義的時間像を帰しているように思われる。メリックスも、そうルイスを批判する(Merricks, 2007, pp.119-125)。ルイスは、永久主義的・四次元主義的世界から過去と未来を削り取った後に残るのが現在主義的世界であると考えているらしいからである。現在主義者にとって、存在するのは、時間上に延び広がった四次元的対象から過去の部分と未来の部分こそぎ落とした極少の切片だけである、

とルイスは考えているように思われるからである。そうだとすれば、それは現在主義に対する誤解である。

現在主義者は、昨日の私の頭痛が存在しないと言いたいのであって、それに加えて頭痛を感じていた昨日の私も存在しないと言いたいわけでは決してない。頭痛が消えることが、頭痛を感じていた私に頭痛を感じていない私が取って代わることだとすれば、現在存在しているのは私の時間部分ということになってしまうだろう。しかし、現在主義者が同時に四次元主義者でもあることは通常はありえない。一つの対象が、存在している現在の時間部分と、存在していない過去と未来の時間部分によって構成されることになってしまうからである。存在しているものと存在していないものによって構成されるような何かがあるとすれば、それはとても奇妙な存在者であることになるだろう。同一の対象が持続的に存在することが可能であるとする現在主義者は、対象はどの瞬間をとっても全体が余すところなく存在しているとする三次元主義者でなければならないのである。

それでは、常識的な現在主義的世界とはどのような世界でなければならないのだろうか。

サイダーは、三次元的対象はその対象全体が、異なる時点において時空領域の様々な区域を占めることで時空領域を通り過ぎて行くと述べている(Sider, 2001, p. 3)。しかし、これは三次元主義の描像としてはともかく、現在主義の描像としては適切ではない。これでは物が通過してきた時間も、これから通って行く時間も、現在とともに存在することになってしまうからである。2000年も2015年も3000年も等しく存在している。そして、今が2015年であるとは、すべての対象が2015年に存在しており、それ以外の時間は、2000年も3000年も4000年も、物が存在しない空っぽの時間であるということ

になってしまう。2016年が今になれば、すべての対象が2016年に移動することになり、2015年は空になるだろう。また、2015年が現在であるときの2015年のメンバーと2016年が現在であるときの2016年のメンバーには、当然かなりの入れ替わりがあることだろう。

すべての対象は現在のみに存在するという点で、この世界は現在主義的世界に似ているが、現在以外の時間が空のまま存在するという点において現在主義とは決定的に異なっている。このような世界が存在することは論理的には可能であるが、それは常識に著しく反する世界である。2000年に何かが存在するのは2000年が現在であるときだけであり、それ以外のときには2000年には何もないことになるからである。2000年にはプラトンや徳川家康やマンモスがいないだけではなく、2015年である今、2000年にはイチローもアントニオ猪木もパンダもいないのである。イチローやアントニオ猪木やパンダは、今は2000年を後にして2015年にやって来ているからである。このような世界像を持つ人がいるのかどうか、私は知らない。

現在主義的世界においては、対象が時間の経過とともに連続的に出現し、消えて行くと言われることがある。四次元主義の世界におけるように、対象の時間部分が、ではなく、対象全体が、丸ごと出現し、丸ごと消えて行くのである。これが現在主義的世界像として標準的なものなのかどうか、私にはよくわからないが、しかし、そうだとすれば、ほとんどの一般市民が現在主義を受け入れて生活しているなどとはとても思えない。それに、これはやはりルイスのような批判を誘発する恐れのある言い方である。

現在主義によれば、昨日の頭痛は存在しない。それは頭痛が消えたからである。未来の頭痛も存在しない。それは頭痛がまだ出現していないからである。それでは、なぜ頭痛が生じていた

ときの私の身体や、また、身体と別に心があるとすれば、頭痛が生じていたときの私の心が、頭痛とともに消えて、今は存在していないと考えてはいけないのだろうか。また、頭痛が出現するときの私の身体や心が、頭痛と同じように今は存在していないと考えてはいけないのだろうか。そして、すべての対象が連続的に出現し、出現するとすぐに消えて行くのならば、私も机も椅子も、この瞬間だけに存在する瞬間的存在であると考えの方が自然ではないだろうか。

ソクラテスもプラトンも徳川家康も、昨日の頭痛もおとといの入道雲も存在しない。リーリーとシンシンの子供も明日の空腹も今年の秋の夕焼けも存在しない。こうした思いは、確かに誰もが抱く常識的な思いであるかもしれない。しかし、常識の背後にある世界像はどのようなものなのか、それをとらえるのは簡単なことではない。以下において、私たちの持つ世界像をできる限り正確に描くことを試みてみよう。そして、それが整合性を持つものなのかどうか、また、それが哲学的現在主義と合致するものなのかどうか、考えてみることにしよう。

II 物と出来事と因果

現在主義者が「過去の対象も未来の対象も存在しない」と言うとき、「対象」には人や物だけではなく、出来事も含まれる。2015年である今、プラトンやマンモスだけではなく、第二次世界大戦やアントニオ猪木対モハメド・アリ戦やリオデジャネイロオリンピックも存在しないのである。しかし、「過去の出来事や未来の出来事が存在しない」とはいささか不自然に響く。「第二次世界大戦は存在しない」と言えば、その人は修正主義者とみなされるかもしれない。また、「猪木・アリ戦は存在しない」と言えば、その人は皮肉を言っていると解釈されるかもしれな

い。その人は、「あのようなものは本当の戦いではない」と言いたかったのかもしれない。

「過去の出来事は、消えてなくなったのではなく、文字通り過ぎ去ったのである」、そう言った方が自然に聞こえるだろう。それに対して、人や物は出来事と同じような意味で過ぎ去ることはない。「人が過ぎ去る」と言えば、それは空間的に離れて行くことを意味する。「電車が過ぎ去る」とは、ホームの前を電車が通過して、遠ざかって行くことである。過去の人や物は、過ぎ去ったのではなく、いなくなったのである。プラトンは死に、マンモスは絶滅することによって、存在しなくなったのである。少なくとも常識的にはそうである。

同様に、未来の出来事は存在しないのではなく、まだやって来ていないのである。「リオデジャネイロオリンピックがやって来る」と言えば、リオデジャネイロオリンピックの開幕の時間が近づいてくるということである。一方、人や物の場合は、「やって来る」と言えば、空間的に近づいてくること以外の意味を持つことはない。リーリーとシンシンの子供はいつの日か到来するのではなく、まだ存在していないのである。

第二次世界大戦や猪木・アリ戦は単一の出来事ではない。前者は無数の弾丸の発射や爆弾の投下、おびただしい数の負傷や死の集合であり、後者は数少ないパンチとキックの集合である。世界には無数の物があり、それぞれが無数の性質を持っている。そして、物の性質は刻々と変化する。物の性質が変化するとは、物の持つある性質が消え、別の性質に入れ替わることである。パンチで顔が変形するとは、顔がそれまでの形を失い、別の形を持つことである。パンチで顔が変色するとは、それまでの肌色が消え、赤みが生じることである。こうした物の性質変化は、出来事の最小単位であるとみなすことができるだろう。また物はある時点で生じ、いつ

かは消滅する。ものの誕生と消滅も出来事の一つである。私たちが「第二次世界大戦」や「猪木・アリ戦」と呼んでいるものは、こうした出来事によって構成されている。

それではなぜ「過去の出来事は存在しない」という言い方が奇妙に響くのだろうか。

プーチンの誕生は過去の出来事である。現在主義者はプーチンの誕生は存在しないということだろう。それではなぜプーチンが今存在しているのだろうか。誕生なしに存在するプーチンとはいかなる存在者なのだろうか。ソクラテスの死は過去の出来事である。それゆえ、現在主義者によればソクラテスの死は存在しない。それではなぜ今ソクラテスは存在しないのだろうか。ソクラテスの死がなければ、ソクラテスは今も存在しているはずではないだろうか。東京タワーを照らす照明の点灯は過去の出来事である。照明の点灯が存在しないとすれば、なぜ東京タワーの姿が今夜空に明るく浮かび上がっているのだろうか。それゆえ、プーチンの誕生もソクラテスの誕生も東京タワーの照明の点灯も存在しないと言うわけには行かないのである。「それらは存在しない」と言うかわりに、「それらは過ぎ去った」と言うべきなのである。

現在主義に対して、現在の対象しか存在しないとすれば、時間をまたいだ対象間の関係が不可能になってしまうという批判が向けられることがある(Cf. Tooley, 2012, P. 31)。たとえば、因果関係は時間をまたいだ出来事間の関係である。ボールがバットの芯に当たり、そのボールがグラウンドを越えて教室のガラス窓にぶつかり、ガラスが割れたとしよう。バットとボールの衝突と、ボールとガラスの衝突と、ガラスの破損という三つの出来事の間には因果関係が成立している。ところが、現在主義者が主張するように、過去の出来事は存在しないとすれば、ガラスの破損は何によって引き起こされたこと

になるのだろうか。ガラスが壊れた時点において、バットとボールの衝突は過去の出来事になっているはずではないだろうか。教室のガラスは何の原因もなしに割れたのだろうか。こうして、過去の出来事が存在しないとすれば因果関係が成立することが不可能になってしまうように思われるのである。

これは未来についても言えることである。私たちは未来の出来事を引き起こそうとして何かを行う。たとえば、火を付けようとしてマッチを擦る。しかし、未来の出来事が存在しないとすれば、なぜ現在の出来事が何かの原因となることができるのだろうか。現在の私の行為が、なぜ存在しないものに影響を与えることができるのだろうか。

ソクラテスの死とソクラテスの不在やプーチンの誕生とプーチンの存在の関係は、通常因果関係とは異なるだろう。プーチンの誕生とプーチンの存在が自然法則によって結合されているわけではないからである。法則が異なっていれば、プーチンは誕生することなく存在することができただろう、などということはない。誕生することなく存在することができる者は神だけである。しかし、プーチンの誕生とプーチンの存在の関係は、時間をまたいだ世界の在り方の間の関係であるという点において、また、後続の状態が先立つ出来事の存在に依存するという点において、通常因果関係と類似している。

ところが、一方で、現在主義者は、過去の対象も現在の対象も等しく存在していると主張する永久主義者に対して次のように問うことができるだろう。ソクラテスが存在しているのなら、なぜ誰もソクラテスを見たり、ソクラテスの声を聞いたり、ソクラテスと握手をしたりすることができないのだろうか。ソクラテスが混迷する現在の世界情勢についてどう考えているか知りたいたいと思っても、ソクラテスの見解を知るこ

とができないのはなぜだろうか。それはソクラテスが存在しないからではないだろうか。沢村栄治の速球を見たいと思っても、その速球をバットに当てたいと思っても、見ることもバットに当てることもできないのはなぜだろうか。田中将大の速球ならば見ようと思えば見ることができるし、田中将大と知り合いになって、うまく頼み込めば、こちらの構えたバットめがけて速球を投げ込んでくれるかもしれない。そうすれば、バットに当てることも不可能ではないだろう。沢村栄治と田中将大はどこが違うのだろうか。沢村栄治だけではない。私たちは、星飛雄馬の大リーグボールを見ようと思っても、大リーグボールをバットに当てようと思っても、見ることもバットに当てることもできない。大リーグボール一号でさえバットに当てることができない。それは、星飛雄馬が虚構の中の登場人物で、現実には存在しないからである。沢村栄治の場合も同じではないだろうか。沢村栄治が存在しないがゆえに、私たちは沢村栄治の速球を見ることもそれをバットに当てることもできないのである。沢村栄治やソクラテスは田中将大ではなく星飛雄馬と同類なのである。

ところで、見ることや聞くことは主体と対象の間の因果作用である。反現在主義者が過去の対象と現在の対象の間に因果関係が成立していることを論拠に過去の対象の存在を主張するならば、現在主義者は過去の対象との因果関係の不可能性を論拠に過去の対象の非存在を主張するのである。この対立を調停することはできるだろうか。

ここで、人や物と人や物の性質と出来事と因果関係の関係について簡単にスケッチしておこう。

人や物は様々な性質を持つ。そして性質は様々な因果的力を持つ。赤さは赤の知覚体験を引き起こす力を持ち、球形性は球形の知覚を引

き起こしたり、適当な材質によって実現されている場合には、斜面を転げ落ちたりする力を球形の物に付与する。重さは力に対する抵抗力を持ち、水溶性は水に溶ける力を持つ。人の場合はさらに、見たり聞いたり、考えたりする力を持ち、速球を投げたり、バットでボールを打ったりする力を持っている。このように、因果的力が帰属するのは物であり、人である。そして、物や人がどのような因果的力を発揮するかは、それらがどのような性質を持つかによって決まる。

ところで、これらの力は常に顕在化しているわけではない。砂糖の水溶性は水に入れてかき混ぜなければ顕在化しないし、ポストも光が当たらなければ、また光が当たっても周りに誰もいなければ赤く見えることはない。また、人は常に何かを見たり、何かを考えたり、ボールを投げたりしているわけではない。

物の持つ因果的力の顕在化の引き金を引くのは、多くの場合特定の出来事である。色の場合は光が当たること、水溶性の場合は水に入れられること、脆さの場合は固いものと衝突すること、マッチの発火性の場合にはマッチ箱の側面と接触すること、打撃力の場合にはボールを打とうとすること。ただし、人間の思考の場合、何が引き金を引くのか、必ずしも定かではない。考えようとする意図だろうか。しかし、気が付いたらいつの間にか考えごとをしていたということはよくあることである。これは興味深い問題ではあるが、ここでは重要ではない。

そして、引き金を引く出来事によって生じたさらなる出来事や状態において、物の持つ因果的力が顕在化する。砂糖の水溶性の場合には砂糖水が出来上がることにおいて、ガラスのもろさの場合にはガラスが割れることにおいて、マッチの発火性の場合にはマッチに火がつくことにおいて、人の打撃力の場合にはバットの芯にボ

ールが当たることにおいて。人間の思考力の場合、何においてそれは顕在化するのだろうか。思考することにおいてだろうか、それとも発話や論文や著作においてだろうか。おそらくそれは思考することにおいてなのだろう。ちょうど、怒り易さが怒ることにおいて、泣き上戸が鳴くことにおいて顕在化するように。そして、怒りにまかせて蹴った壁のへこみが怒ることの結果であるように、発話や論文や著作は思考することの結果なのだろう。だが、これもさほど重要なことではない。

いずれにしても、物に関して言えば、因果関係とは、物の持つ力が顕在化する引き金を引く出来事と、それが顕在化した出来事や状態の間の関係である。砂糖を水に入れたのが原因で、砂糖水ができたのが結果、マッチを擦ったのが原因で、火がついたのが結果、ボールがガラスに当たったのが原因で、ガラスが割れたのが結果、というように。

このように、因果的効力の帰属先が物や人であるならば、現在存在していない物や人が、現在、因果的効力を発揮できないのは、あるいは、因果関係の起点となることができないのは、当然のことである。ソクラテスを一目見ようと思っても、現在の世界情勢についてソクラテスの説を聞きたいと思っても、沢村栄治の速球を打ちたいと思っても、ソクラテスや沢村栄治が過去の人物である限り、それはかなわぬ願いなのである。

一方、世界が現在のようないかたをしているのは、過去において特定の出来事が存在したからである。現在、誰かのタバコに火がついているのは、誰かがマッチを擦ったからである。現在、教室の中にガラスが散乱しているのは、誰かのバットにボールが当たり、そのボールがガラスにぶつかったからである。また、現在、私の書棚にあるプラトンの対話篇があのような

内容であるのは、ソクラテスが、かつて、思考力を発揮したからである。

誰かが私の書棚からプラトンの対話篇を取り出して読み、その中のソクラテスの言葉に心を動かされ、ソクラテスについて考え始め、それがソクラテス論として結実したとすれば、ソクラテス論の遠因の一つはソクラテスの思考にあることになる。しかし、それは、ソクラテスの身体やソクラテスの心の持つ因果的力が新たに発揮されたということではない。ソクラテスその人が新たな因果の起点となったということではない。因果の起点は、この場合、私の書棚の本ということになるだろう。その本の持つ無数の潜在的な力の一つが、ソクラテス論を生み出したのである。それは次のような場合と同じである。教室に散らばったガラスを踏んで足にけがをした生徒がいるとしよう。ガラスの破損は、適度な硬さを持ったボールが因果的効力を発揮した結果である。しかし、だからと言って、生徒のけががボールのせいであると言う人はいないだろう。ボールではなく、適度な形をしたガラス片がその因果的力を発揮したのである。ソクラテスとプラトンの対話篇とソクラテス論の関係は、ボールとガラス片と足のけがの関係に等しいと言うべきである。

過去の物や過去の人は新たな因果関係の起点となることはできないが、過去の出来事は現在の世界の在り方を決定している。そうであるならば、「出来事は過ぎ去り」、「過去の人や物は存在しない」という言い方には、それなりの合理性がある。ソクラテスの死は過ぎ去り、それゆえ、ソクラテスはいないのである。

III 持続的存在と瞬間的存在

現在主義者のジーマンは次のように言う。
物や出来事は未来から現在へ移動(move)し

てきて、そして、現在から過去へと移動して行く。それは、物や出来事が存在へやってくる(come into existence)、やがて存在から出て行く(go out of existence)ことである。現在主義は、過去と現在と未来のこうした違いを額面通り受け入れる立場である(Zimmerman, 2008, p. 213)。

ふつうは「出現する」とでも訳されるであろう come into existence とはこの場合どのようなことなのだろうか。また、「なくなる」とでも訳されるべき go out of existence とはどのようなことなのだろうか。過去の物も未来の物も、過去の出来事も未来の出来事も、過去の時間も未来の時間も存在せず、存在するのは現在の物、現在の出来事、現在の時間だけである、という現在主義の主張を額面通りに受け取るとしたら、それらの表現によって現在主義者はどのような世界を描き出そうとしているのだろうか。デカルトの神による連続的創造説のように、対象が丸ごと連続的に生み出されては消えて行くような世界なのだろうか。それとも、アウグスティヌスが退けた、対象が未来から出現すると同時に過去へ隠れて行くような世界なのだろうか。しかし、私たちが「ソクラテスはもう存在しない」と言い、「リーリーとシンシンの子供はまだいない」と言うときに思い描いている世界は、物が連続的に生成消滅するような世界ではないだけではない。それは、物が未来からやって来たと思えばその瞬間に過去へと去って行く、というような世界でもないように思われる。

物が存在し始める、あるいは、物が存在することをやめる、とは、通常はどのようなことを意味するのだろうか。

それまで存在していた物がなくなるとき、その物は過去へと消えたのだ、と考えたくなることは確かにあるかもしれない。出来事だけではなく、物や人も過去へと去って行くのである、

という思いに駆られる人がいるかもしれない。たとえば、亡き人の姿を思い浮かべながら、「あれは過去の人だ」とつぶやいてみたことのある人がいるかもしれない。また、昨日の頭痛を思い出しながら、「あの痛みは過去のものとなった」、と考えたことのある人もいることだろう。それは正確にはどのようなことなのだろうか。

それまで照っていた太陽が雲に遮られたとしよう。太陽はどこに隠れたのだろうか。太陽は過去へと去って行ったのだろうか。もちろんそのようなことはない。太陽は雲の後ろに隠れただけである。太陽が雲の陰に隠れることによって、太陽が出ていた時間が過去となったのである。しばらくして、太陽は再び顔を出したとしよう。太陽は未来から出現したのだろうか。もちろんそうではない。太陽は雲間から姿を現したのである。太陽が雲間から姿を現すことによって、太陽が雲に隠れていた時間が過去のものとなったのである。

今度は、太陽系最後の日に太陽が突然消えてしまったとしよう。太陽はどこへ消えたのだろうか。過去へ、だろうか。そうではない。雲で見えなくなった太陽が、過去に隠れたのではなく、雲に隠れたのだとすれば、消えた太陽が過去に消えるはずはない。太陽は端的に消えたのである。消えて存在しなくなったのである。太陽が消えることによって、太陽が存在していた時間は過去のものになったのである。赤ちゃんが誕生したとすれば、その赤ちゃんは未来からやって来たのではない。赤ちゃんはどこからやって来たわけでもなく、端的に誕生したのである。赤ちゃんが誕生することによって、その赤ちゃんが存在していない時間は過去となったのである。星や赤ちゃんのような物や人だけではなく、痛みのような人の状態や形のような物の状態についても同じことが言える。頭痛が消えるとは、頭痛が過去へ退くことではない。頭痛

は端的に消えたのである。そして、そのことによって、頭痛を感じていた時間は過去のものとなったのである。

物が誕生することが、物が未来から出来ることではなく、物が消滅することが、物が過去へ退くことではないとすれば、物が持続的に存在することが、物が未来からの出来と過去への退出を繰り返すことであるわけではないのは当然のことである。「物はただ単に存在し続けるだけである」と言うのが適当であるように思われる。

それでは、昨日の頭痛が存在していないとすれば、頭痛を感じていた昨日の私も存在していないことになるのではないか、という問いにはどのように答えるべきだろうか。

仮に、頭痛が消え去ることが、頭痛が過去へ退くことであるとすれば、頭痛を感じていたときの私も頭痛と一緒に過去へ退いて行くと考えるのは自然なことかもしれない。そして、頭痛の消滅とともに頭痛を感じていた私も消えてしまうと考えることも。しかし、頭痛が消えるとは、頭痛が過去へ退くことではなく、それが端的に消えてしまうことであるとすれば、頭痛に引きずられるようにして頭痛を感じていた私も一緒に消えてしまう、と考えることもなくなるだろう。そして、頭痛は消えても頭痛を感じている私は存在し続けるということには何か奇妙なところがある、という思いに襲われることもなくなるだろう。

結局のところ、「物が存在するとは、物が未来から存在へやって来て、やがて存在から出て行くことである」という言い方は、常識に反するだけではなく、穏健な現在主義的世界像の表現としても適切ではないように思われる。現在の人や物しか存在しないと信じているものの、あらゆる対象は一瞬の間しか存在しないと考えているわけではなく、また、昨日の頭痛とともに

昨日の私も消えてしまったと四次元主義的に考えているのでもないような人々を「穏健な現在主義者」と呼ぶとすれば、それは、穏健な現在主義的世界における物の持続の仕方を正確に描き出してはいないと言えるだろう。

ところで、「過去の人や物は過ぎ去った」とは言わないかもしれないが、痛みならば「一過性の痛み」という表現があるように、それが「過ぎ去る」と言うことはさほど不自然なことではないのではないだろうか。痛みは過ぎ去ったからこそ今私は痛みを感じていないのではないだろうか。痛みが消えるとは痛みが過ぎ去ることではないだろうか。そして、痛みが過ぎ去るとは、やはり、痛みが過去へと退いて行ったということなのではないだろうか。「痛みが過ぎ去る」という表現で、いったい私たちはどのようなことを言おうとしているのだろうか。

痛みが過ぎ去るとすれば、色はどうだろうか。白い壁に赤いペンキがかけられて、一瞬のうちに壁面全体が赤くなったとしよう。白さは過ぎ去ったのだろうか。消えた太陽のときと同様に「白さは過ぎ去ったのではない、白さは消えたのだ」と言いたくなることだろう。過ぎ去ったのは、白さが消える、あるいは白さが赤さと入れ替わるという出来事である。壁の変色の瞬間が過ぎ去ったのである。

音の場合はどうだろうか。お寺の鐘が鳴ったとしよう。しばらくすると鐘の音は余韻を残しながら消えて行く。あの鐘の音は過ぎ去ったのだろうか。鐘の音ならば「過ぎ去った」という言い方はそれほど不自然には感じられないかもしれない。壁の白さと鐘の音はどこが違うのだろうか。

「鐘の音が過ぎ去る」が自然に聞こえるのであれば、それはおそらく、この場合の「鐘の音」が鐘の音の聴覚体験のことだからである。白さが壁という知覚対象の性質とみなされるのに対

して、鐘の音は知覚体験の質とみなされているのである。

私たちは目覚めているときはいつも変化を知覚している。音の流れを知覚し、車窓の風景の移り変わりを知覚し、痛みが退いて行くのを知覚している。こうした変化の知覚は、知覚体験の質、あるいは知覚体験の内容が刻々と入れ替わることの知覚だけではなく、体験自体が刻々と遠ざかりつつあることの知覚も含んである。ド・レ・ミの音の流れを知覚するとは、ドの次にレが、その次にミが聞こえてくることを知覚するだけではなく、それとともに、それぞれの音の聴覚体験が遠ざかりつつあることを知覚することでもある。ドが聞こえていたときとそれに続くレが聞こえていたときが踵を接してともに遠ざかりつつあることが知覚されているのである。こうして一連の音が流れているように聞こえてくるのである。ここで、「遠ざかる」とはもちろん時間的な意味であり、現在の時点から遠ざかるということである。それゆえ、音の知覚の場合には、「鐘の音が遠ざかる」あるいは「鐘の音が過ぎ去る」という表現を、ある程度の実感を伴って用いることができるのである。そして、こうした変化の知覚とともに、私たちは時間が流れていることを実感するのである²。したがって、おそらく、色の場合でも、壁の白さではなく、壁の白さの視覚体験ならば、それが「過ぎ去る」という言い方もさほど不自然には響かないかもしれない。

体験との結び付きが色や音に比べてより強いのは痛みである。鐘ならば、誰にも聞かれずに鳴り続けるといったことはあるかもしれないが、体験されない痛みといったものは存在しない。体験されることは痛みの本質であると言ってよい。そして、「痛み」とは体験の質のことなのである。かゆみの体験とも熱さの体験とも異なる痛み体験独特のあの質感、それが痛みなのであ

る。「痛みが過ぎ去る」という言い方が日常的になされるのもそのためである。

音や痛みが過ぎ去るとは、正確には、特定の聴覚体験と特定の痛みの体験が過ぎ去ることである。痛みやかゆみといった体験の質が消えれば痛み体験もかゆみ体験も過ぎ去る。痛み体験が過ぎ去るとは痛みが消えて存在しなくなることなのである。

私たちは過ぎ去った痛み体験を、すなわち、消えた痛みを思い出すことができる。昨日の頭痛も、昨年の歯痛も思い出すことができる。痛み体験と痛みの想起はどのような関係にあるのだろうか。痛み体験が痛みの想起を引き起こすという意味で、痛み体験が痛みの想起の原因となっているのだろうか。その場合、痛み体験と痛みの想起の関係は、マッチを擦ることとマッチに火がつくことの関係と類比的であることになるだろう。

しかし、そうではないように思われる。痛みを体験したことがなければ痛みを想起できないのは確かだとしても、痛み体験が痛みの想起の引き金を引くわけではないからである。痛みを思い出すのは、たとえば、虫歯の治療のために通っていた歯医者者の看板が目にとまったときや、「歯が痛い」と呻いている友達に会ったときである。歯医者者の看板を見たこと、歯痛の友達に会ったことが原因となって、歯痛の記憶がふとよみがえってくるのである。また、まれには、意図的に痛みを思い出すといったこともあるかもしれない。かつて、一度だけ体験した特殊な痛みを思い出そう試みるといったことがあるかもしれない。その場合、痛みの想起は心的行為の一つとなることだろう。痛みを思い出そうと試みるのが原因で、その結果が痛みの想起なのである。

そうかといって、痛みの想起が知覚に比べられるようなものであるというわけでもない。赤

さの知覚において赤い対象の持つ因果的効力が顕在化するように、痛みの想起において痛みの持つ因果的効力が顕在化するというわけではない。痛みの因果的効力は、痛みを感じている人の顔をしかめさせる、痛みを感じている人に鎮痛剤を服用させる、などの仕方で顕在化するのであって、痛みの想起において顕在化するわけではない。

痛みは、あるいはより正確には、痛み体験は、痛みを感じた人に痛みを思い出したり痛みを想像したりする能力を与えるのである。痛みを感じたことのない人は痛みを思い出すことも痛みを想像することもできない。痛み体験によって獲得された痛み想起能力が痛みの想起において顕在化しているのである。

昔の歯痛を思い出した人は、思わず口をすばめたり、いざというときに備えて鎮痛剤を買いに行ったり、念入りに歯を磨いたりするようになるかもしれない。痛みの想起がさらなる身体運動や行為を引き起こしたことになるが、これは、消えてしまった痛みが因果的力を発揮したわけではない。消えてしまった痛みが口をすばめさせたり、鎮痛剤を買いに走らせたりしたわけではない。痛みの記憶像が力を発揮したのであり、痛みの想起体験が身体運動や行為の引き金を引いたのである。

このように、一度消えたら二度と力を発揮することがないという点において、痛みのような心的性質と物理的性質の間に違いはない。消えてしまったものは、消えてしまった後まで影響を残し続けるし、そこから発した因果連鎖はどこまでも続くことができるが、消えてしまったものは新たな因果連鎖の起点となることはできないのである。

時間と物の持続に関しては様々な哲学的立場の対立がある。時間のA理論とB理論の対立、物の持続に関する三次元主義と四次元主義の対

立、そして、現在主義と永久主義の対立。

A理論とB理論は時制の存在をめぐって対立している。過去・現在・未来という時制は実在しているのだろうか、それとも、実在するのは出来事の前後関係だけなのだろうか。三次元主義と四次元主義は時間部分の存在をめぐって対立している。物は空間部分とともに時間部分も持つのだろうか、それとも、時間部分を持つのは出来事だけなのだろうか、あるいは、時間部分といったものは存在しないのだろうか。

それでは、現在主義と永久主義は何をめぐって対立しているのだろうか。もちろん、過去と未来の対象の存在についてである、と言われるだろう。では、これまで述べてきたような立場は現在主義的なのだろうか、永久主義的なのだろうか。

これまでのところをまとめてみよう。人や物は瞬間的存在者ではない。人や物が持続的に存在するとは、生成消滅を繰り返すことでも、未来と過去への出入りを繰り返すことでもない。存在しなくなるとは、生成がやむことでも、未来からの出来が止まることでもない。存在し始めるとは、生成が始まることでも、未来からの出来が始まることでもない。持続的に存在するとは端的に存在することであり、消えるとは端的に消えることであり、誕生するとは端的に誕生することである。存在と消滅と誕生は、それ以外の何かによって分析されるようなことではないのである。また、人や物は消えて存在しなくなるが、出来事は過ぎ去る。人や物は誕生して存在し始めるが、出来事は到来する。

以上の見解は整合性を持つだろうか。

「過去の人や物が存在しないのならば、過去の出来事も存在しないと言うべきではないか」と反論されるかもしれない。ソクラテスが存在しないならば、ソクラテスの説教も存在しないはずではないだろうか。それならば、次のよう

に言いかえても良い。現在、因果的力を発揮できるのは、現在存在している人と物だけであるが、現在の世界のあり方は過去の出来事によって決定されている。ソクラテスはもう説教することはできないが、ソクラテスがかつて行った説教は現在も影響を与え続けているのである。

以上の見解に矛盾が含まれるようには私には思えない。さらに、哲学者ではない一般の人々も、多くは上のような世界像を抱いているのではないかと私は思う。それでは、こうした世界は現在主義的世界なのだろうか、それとも永久主義的世界なのだろうか。過去から未来へと続く因果連鎖を認める点においてそれは永久主義的なのだろうか。それとも、現在の人と物以外のものに、現在、因果的力を発揮する可能性を認めないという点において、それは現在主義的なのだろうか。しかし、これを、「現在主義」と呼ぼうが「穏健な現在主義」と呼ぼうが、「永久主義」と呼ぼうが「穏健な永久主義」と呼ぼうが、あるいは「折衷主義」と呼ぼうが、それは世界のあり方についての形而上学的対立ではなく、単なる言葉の使用をめぐる対立である。それとも、それ以外に、それをめぐって現在主義と永久主義が対立するような何らかの特性が世界にはあるのだろうか。あるとすればそれはどのようなものなのだろうか。私にはわからない。

¹ 星野(2013)、星野(2014)を参照されたい。

² 変化の知覚には知覚内容の短期記憶と知覚体験の短期記憶という二重の短期記憶が関与しているように思われる。変化の知覚について詳しくは星野(2007)を参照されたい。なお、本文では「体験が現在の地点から遠ざかりつつあることを知覚する」あるいは「時間が流れていることを知覚する」というような、時間に関するA理論を前提としたような表現が使われているが、二重の短期記憶説は時間の形而上学に関しては中立である。二重の短期記憶説はB理論とも両立可能である。

文献表

- Heller, M. (1990), *The Ontology of Physical Objects*, Cambridge University Press.
- 星野 徹(2007)、「持続の知覚」『埼玉大学紀要 教養学部』第42巻第2号
- 星野 徹(2013)、「持続と同一性」『埼玉大学紀要 教養学部』第49巻第1号
- 星野 徹(2014)、「存在することと無から生じること」『埼玉大学紀要 教養学部』第49巻第2号
- Lewis, D. (1986), *On the Plurality of Worlds*, Blackwell Publishing.
- Markosian, N. (2004), “A Defense of Presentism”, in Zimmerman, D. ed. *Oxford Studies in Metaphysics*, vol. 1, Oxford University Press.
- Merricks, T. (2007), *Truth and Ontology*, Oxford University Press.
- Sider, T. (2001), *Four Dimensionalism*, Oxford University Press. (セオドア・サイダー『四次元主義の哲学』中山康雄監訳、(2007)、春秋社)
- Thomson, J. J. (1983), “Parthood and Identity Across Time”, repr. In Kim, J. et al. eds. (2011), *Metaphysics : An Anthology, Second Edition*, Wiley-Blackwell.
- Tooley, M. (2012), “Against Presentism”, in Bardon, A. ed. *The Future of the Philosophy of Time*, Routledge.
- Zimmerman, D. (2008), “The Privileged Present : Defending an “A-Theory” of Time”, in Sider, T. et al. eds. *Contemporary Debates in Metaphysics*, Blackwell Publishing.